

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

【出典】
まつうらひさき
松浦寿輝
『断つこと、放つこと』

・ 大阪大学
・ 鳥根大学
・ 都留文科大學
・ 學習院大學
・ 上智大學
・ 日本大學
・ 早稻田大學
・ 近畿大學

15

問五 傍線部③「世界をその裸形において、その異邦性をあらわにしつつ手わたす」とはどのようなことか。本文に即して、五十字以内で説明せよ。

イイ筆者はレヴィナスに導かれて、ロダンの彫刻やセザンヌの絵画に接することができた。

工業地帯の風景が公害に汚染されていくのを見たため筆者は深い悲しみを覚えた。

ハ 筆者は個人的な体験を通じてレヴィナスの文章を理解しえたと思った。

ニ 筆者が工業地帯に感じた個人的感情は、他の地域に住む人々と共有できないものだ。

ホ 筆者は田園風景を好んでいたため、工業地帯の風景になじめなかった。

1

げてゆくことができる。それは「道具」が「わたし」の身体の延長としてあり、その限りに
 において「わたし」の意志と欲望に対して聞かれていたからだ。他方、紙飛行機は「世界」
 そのものに所属し、その薄さと軽さによってただ「世界」の縁を滑ってゆくだけだ。真白
 な紙飛行機が朝の光の中をゆつくりと滑空している。滑空はいつまでもいつまでも続くよ
 うに思われる。あの引き延ばされた時間の中を浮遊する紙飛行機は、この世でもっとも優
 美な物体の一つではないか。たぶんあれはわたしの「魂」なのではないか。

5 「いつまでもいつまでも」というのはむしろ単なる比喩にすぎない。紙飛行機の飛行に
 は、それがあたかも「いつまでもいつまでも」続くと見えるかのような不思議さの印
 象が、そのつどまわりついている。そうした手品を可能にするのは、決して強すぎるこ
 とのない弱い空気の流れである。空が風いでいて空気にまったく動きがない場合、紙飛行
 機はたちまち失速し、自身の重量を支えきれず墜落してしまう。しかし、強すぎる風もま
 た、過度に加速したりバランスを崩させたりして、落下を早めるだろう。ただ微風だけが、
 紙飛行機の魔術的な飛行の持続に貢献するのだ。微風とは、わたしの手から放たれた物体
 を受け入れることに同意するとき「世界」がそれに向かって投げかける、微笑みのような
 ものではないだろうか。

6 ただし、いかに簡素で単純なオブジェとはいえ、わたしの手指が或る加工を施すとい
 うことがなければ、紙は紙飛行機へと変身しえない。だから、きわめて稀薄な形ではあ
 るが、その飛行にはやはりわたしの手が関与していないわけではないのだ。紙飛行機の愉

20

25

30

しみは、わたし自身の手指のこうした稀薄な関与の仕方における、責任と無責任との微妙
 な均衡にあるように思われる。

7 そして、その均衡とは、それ自体わたし自身の意識によつては統禦しがたいものである。
 子供の頃に紙飛行機を折って日がな一日遊んだことのある人なら知つていようが、あれ
 は、よくよく念入りに折り目の位置を計測し、試行、サクゴの拳句ようやく割り出した適
 度な幅と長さになるようあちこちの部分を整え、そしてきっかりとした直線になるよう正
 確に折つていつて、そうしたきつちりとした作り方で仕上げた飛行機が、それではいちば
 んよく飛ぶかという、奇妙なことに必ずしもそういうものでもないのである。

8 わたしが夢想するのは、たとえば、こうした紙飛行機の飛行のような言語である。そ
 れは、わたしが自分の器官の延長として対象世界に差し向ける「道具」としての言語とは
 まったく異質の言語でなければならぬ。わたしの手から放たれるや、爾後は「わたし」で
 はなくもはや「世界」に所属することになつてしまふ非人称の言語だからである。しかし、
 そうなるためには、やはりわたしがそれにわずかに手を加え、つまりわたしの手指がそれ
 を折り畳み、そのささやかな操作によつてその構造と形態に或る空氣的な「軽さ」を獲得
 させなければならなかった言語でもある。

9 言葉に「軽さ」を賦与するとは、そこから「意味」を削ぎ落とすことだと言つてもよい
 かもしれぬ。もちろん何事かを「意味」しつづけたままでも構いはしないが——「意味」
 を喪失してしまつたらそれはもはや言葉ではないのだから——、しかし、人に「意味」を

35

40

45

「あれはわたしの『魂』ではないのか、と。」

い
だ
ろ
う
か

散文

「たしかに眼にすることが出来るはずである。それが詩ではないのか」

60

55

傍線部 a ～ d のカタカナを漢字に改めよ。

a

b

c

d

傍線部①「紙飛行機は道具」とはまったく異なった何かである」とあるが、このように

言えるのはどうしてか。本文に即して六十字以内に説明せよ。

「紙飛行機の飛行のような言語」とあるが、次のイ・ホそれぞれについて、こう

した「言語」の説明として正しいものを○、誤っているものを×とせよ。

イ 詩人によって簡素で単純な構造を与えられた言葉

意味の伝達という役割をほとんど失いかけているような言葉

二 一切の意味を失ったことで軽さを獲得した言葉

ホ 個人には属さない非人称的なものであるように感じられる言葉

イ
□

ロ
□

ハ
□

ニ
□

ホ
□

問四 傍線部3「散文とは、投げられた言葉のことである」とあるが、「散文」とはどういうものを言い表している四十文字以内の部分本文から抜き出し、その最初と最後の四字ずつを答えよ。

--	--	--	--	--	--	--

問五 傍線部4「そこに照り映えている光の戯れ」とあるが、こうした「光の戯れ」が生まれるのはどのようなときか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- イ 詩人が言葉を折り畳み、それに形を与え、ある対象に向けて放ったとき。
- ロ 自らの手から放たれていった言葉の行く末を、詩人が無心で見つめているとき。
- ハ 自らの「魂」のありようを、詩人が特定の他者に向けて語ろうとするとき。
- ニ 詩人の放った言葉が、その思惑如何にかかわらず「世界」に受け入れられたとき。
- ホ 言葉を操作することの無意味さに気づいた詩人が、すべてを偶然にゆだねたとき。

問六 筆者の考えに合致するものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- イ 放たれた言葉が不思議な輝きを示しながらも、それがあつてなく消え去ってしまうかのようなはかない印象を与える点が、詩の魅力だと考えられる。
- ロ 紙飛行機を放つことは空気のように軽い快楽をもたらすが、人は成長するにつれ、子供のときに感じたこうした快楽を忘却してしまう。

- ハ 道具というものはいくらでも精緻に複雑化させていくことが可能だが、言葉というものを同様にするには、現実的にほとんど不可能である。
- ニ 言葉からできるだけ意味を削ぎ落とし、その言葉を少しでも巧みに操ろうと努力するところに、詩人の喜びが生じると思われる。
- ホ 統禦された道具としての言葉を用い、他者や外界を支配しようとする欲望は、詩人にとつてはとくに必要ないものだといえるだろう。